第二章

〈卑弥呼〉とは誰か？

あまてらす　神の御光（ミヒカリ）　ありてこそ
わが日のもとは　くもらざりけれ
〔明治天皇御製〕

足姫（タラシヒメ）　御船泊（ミフネハ）てけむ　松浦（マツラ）の海
妹が待つべき　月はへにつつ
〔万葉集3685〕

「神功皇后のお船が停泊したという松浦の海ではないが、妻が待っている月は過ぎてゆくばかりだ。
（松と待つをかけている）」

三輪山を　しかも隠すか　雲だにも
こころあらなも　隠さふべしや
〔額田王（ヌカタノオオキミ）／天智天皇（万葉集18）〕

「三輪山をどうしてそのように隠すのか、せめて雲だけでも思いやりがあってほしい。三輪山を隠してよいものだろうか。
（大陸からの侵略に備えるために大和から近江へ突然遷都したときの望郷の歌として有名）」

二・一 〈天照大神（アマテラスオオミカミ）〉説

まず、『魏志倭人伝（ギシワジンデン）』中の女王〈卑弥呼（ヒミコ）〉の正体について、これまで一般によくいわれてきた説を列挙してみよう。

くわしいことはのちの各章で述べるので、ここでは概要のみを記しておく。

◎『日本書紀』重視の理由

本題にはいる前に日本の古代史書と著者の考え方について触れておく。

本書ではテーマの性質上『古事記（コジキ）』と『日本書紀（ニホンショキ）』に何度も言及することになるし、またそれを重視するつもりであることは前章で述べたが、参考文献としてはそのうちの『日本書紀』を中心にすえることにしたい。

『日本書紀』は『古事記』よりずっと詳しく、日本国にとって不名誉なことも正々堂々と書かれているし、また別説も多く記載されているからである。

実質的には『日本書紀』の方が古いという説もかなりあるのだ。

『日本書紀』の信憑性（シンピョウセイ）については、江戸時代から多くの研究があり、とくに戦後の一時期には、単なる伝説や創作にすぎないという意見も出された。

しかしさいきんの考古学の進展によって、そこに記されている事柄の多くが史実――または史実の反映――であることが判明しつつある。

『日本書紀』と似た文章の書かれた木簡（モッカン）が、飛鳥（アスカ）時代の遺跡から何千も出土している。

『記紀』の完成は奈良時代の八世紀の初めであるが、そのとき参考にしたいくつかの書――「帝紀（テイキ）」「旧辞（キュウジ）」などが――があり、さらにその元は百年はさかのぼるとされている。

すなわち飛鳥の推古（スイコ）天皇の御代に聖徳太子（ショウトクタイシ）らが主導して正史の編纂を開始し、整理された文献を蘇我（ソガ）氏の書庫

にしまったといわれているのだ。

この文献は大化改新における蘇我氏滅亡のおりに焼失してしまったらしいのだが、記憶していた役人（当時の歴史家）は多かっただろうし、整理される前の記録は各方面――たとえば豪族たちの本拠――に保存されていたであろうから、八世紀初頭の『記紀』が百年前に整理された元史料によっていることは確かだとおもわれる。

で、この元史料が整理された七世紀初めというと、『魏志倭人伝』の〈卑彌呼〉の時代の三百年から四百年あとにすぎない。

しかも近世以降の数百年の時代変化にくらべて、古代における変化はずっとゆるやかだったから、古代の三百年はいまの百年以下だったと考えることができるであろう。

だから、聖徳太子の時代の歴史家が〈卑彌呼〉の時代をふりかえる作業は、現在の歴史家が、明治・大正または昭和の初期をふりかえる作業になぞらえることができる。

書物がほとんど無かったとしても、抜群の記憶力がそれを補い、代々家伝を伝誦する時代だったので、〈卑彌呼〉の時代についてのかなり正確な記録が『日本書紀』のなかに存在していると考えても、おかしくない。

著者が『日本書紀』を重視するゆえんである。

◎〈天照大神〉説について

さて、まず、

「〈卑彌呼（ヒミコ）〉＝〈天照大神（アマテラスオオミカミ）〉説」

――である。

〈天照大神（アマテラスオオミカミ）〉は太陽を連想させるおなじみの女神で、高天原（タカマガハラ）の主神であり、《伊勢神宮（イセジングウ）》に祀られている。他にもこの大神を祀った神社は数え切れないほどある。

さいきんの義務教育では記紀神話はあまり教えないらしいが、素戔嗚尊（スサノオノミコト）の乱暴で天の岩屋（アマノイワヤ）に隠れて天地が暗くなった伝説（図2・1）くらいは誰でも知っているであろう。

『古事記』では天照大御神と書き、『日本書紀』では生誕時の名は大日霊女貴（オオヒルメノムチ）（霊女は合わせて一つの文字）で、このほうがむしろ本名である。

図２・１　天の岩屋伝説は日蝕を意味するのか？
（昭和10年小學國語巻五より）

また両書ともに尊称として日神（ヒノカミ）とも記している。

この〈天照大神〉こそ〈卑彌呼（ヒミコ）〉の正体だという説は素人学者の好みにいちばん合っており、小説にもなりやすく、驚くほど多くのアマチュアがこの説を主張し、自費出版は「〈卑彌呼〉＝〈天照大神〉説」の物語で花盛りである。

三波春夫に影響をあたえた原田常治（ツネジ）などはその典型だし、さいきんでは井沢元彦もこれに近い説を述べている。

もちろん『記紀』の年代を信じれば、時代的にはまったく合わないし、修正された紀年でも合わない。

古代の天皇一代の期間を十年として〈天照大神〉を〈卑彌呼〉の時代に合わせようとする議論もあるが、必然性に乏しい。

しかし伝説上の女王であることは間違いないし、とくに神武（ジンム）天皇の東征伝説とからめて、「《邪馬台国（ヤマタイコク）》九州説」と矛盾しない説明ができる点が強みである。

年代については、〈卑彌呼〉の活躍への記憶が、〈天照大神〉の神話として残ったのだ――とすれば、矛盾は解消し、ロマンチックな空想や推理がいくらでもできる。小説に数多く書かれるゆえんである。

この〈天照大神〉説を補強する自然現象に「日蝕」がある。

〈卑弥呼〉の死の年と古代の皆既日蝕の年とが一致するため、もし天の岩屋伝説が日蝕をあらわしているとすれば、〈卑弥呼〉とは〈天照大神〉のことだ――という説が導かれるのだ。

古天文学の提唱者として知られ、古代の日蝕を研究した斉藤國治も、この〈天照大神〉説を有力視している。

井沢元彦もこの日蝕と天の岩屋伝説を結びつける斉藤の研究を取り上げて自説を補強している。

「〈卑弥呼〉＝〈天照大神〉説」はロマンにあふれており、われわれの本能をくすぐるようなところがある。

かりに直接的な結びつきは無く、〈卑弥呼〉は別人であることが証明されたとしても、その別人が〈天照大神〉の伝承に影響した可能性はのこされるかもしれない。

「九州説」の白鳥庫吉は、明治時代に、九州にいた〈卑弥呼〉が〈天照大神〉の伝承の原形となった――との推理を発表している。

また逆に、前章で記した和辻哲郎の説のように、〈天照大神〉の伝説を聞いた魏の使者がそれをもとに〈卑弥呼〉の話を書いた――ということも、考えられないではない。

なおもちろんのことであるが、

「〈卑弥呼〉＝〈天照大神〉説」は、

「《邪馬台国》九州説」

――にむすびつく。

〈天照大神〉は神武天皇が日向から大和へ遠征するずっと前の祖神だからである。

◎日本の「神」について

この節のさいごに念のために記しておきたい。

『記紀』における日本の神々の「神」とは、語源的には川上の上や頭と同じとされ、すぐれた人や先祖や自然などへの尊称である。

のちの役職名のXX守やYY帥も語源はおなじだとされている。

卑近なところでは政府や行政を「お上」というのも、料亭の女主人を「女将」というのも、家庭の主婦を「お

カミさん」というのも同源である。
頭髪を「髪（カミ）」というのも身体の頂上にある「上（カミ）の毛」だからで、やはり同源だという説が有力である。
この問題については異説もあり、上と神では古代の発音がちがう（甲類乙類の違い――後出）ので別源だとの説もあるのだが、肥後和男（ヒゴカズオ）、渡部昇一（ワタナベショウイチ）らの碩学が同起源説を述べている。

とすれば『記紀』の神々とは、きわだって優れた祖先または多大な恩恵をあたえてくれる自然や人工物を尊敬して神社に祀ろうという気持ちそのものであり、いまの我々を超えてはいるが、西欧のゴッドとはまったく異なる人間的な存在である。
明治神宮・靖国神社・東郷神社などへの崇拝を想起すれば、それは理解できるであろう。

神道系の宗教として知られる黒住教、御嶽教、金光教、天理教、大本教、生長の家、世界救世教、ＰＬ教団、白光真宏会、霊波之光教会・・・などは、狭い意味での神道宗派であり、むしろ神々に基礎をおいた新宗教として位置づけられるものであって、一般的な神社や神道とは異なる。

一方日本の伝統的な神々とは、広い意味での神道――古神道（コシントウ）と呼ぶ学者もいる――に含まれ、先祖や自然や人工物への崇敬の念であり、日本民族の古くからの文化的伝統であって、神道以外の諸宗教と背反するものではない。
そもそも古神道には教祖がいない。
縄文から弥生にかけて、緑豊かな日本列島で日本人の先祖が生活している間に自然にできた、どくとくの文化だからである。
そういう点で神道は、教祖のいる仏教・儒教・キリスト教などとは「次元」がちがっている。
神道という用語もあとでできたものである。
そして神道には「教」の字がついていないのだ。

神々の例をあげてみよう。
風は志那都比古神（シナツヒコノカミ）であり、野原は鹿屋野比賣神（カヤノヒメノカミ）であり、火は火之夜藝速男神（ヒノヤギハヤオノカミ）であり、排泄物までが神とされて、大便は波邇夜須毘古神（ハニヤスビメノカミ）、小便は彌都波能賣神（ミツハノメノカミ）と名づけられている。
さらには、外国から来た宗教思想である仏教の守護神や仏そのものまで、神社に神として祀るようになった。

近代においては、『記紀』にでてくる神々だけではなく、明治天皇・東郷元帥・乃木大将など過去百年の偉人も神社に祀られたし、戦死した軍人は全員が神になった。

また人間以外では、飛行機や空気や多くの動植物までが祭神となっている。

神社に祀られる神々がキリスト教などの神とまったくことなる人間的存在であることがわかるであろう。

飛鳥時代以降に仏教が輸入されたが、仏教が普及すればするほど、儀式にも建造物にも古神道の伝統が取り入れられた。

原理主義を捨て、古神道の伝統を取り入れて融和し、本地垂迹・神宮寺・社殿形式や儀式の同一化などがなされた。

そのため、仏教は理屈を抜きにして庶民に受け入れられたのである。

だから現在の仏教はある意味では神道の変種とさえいえる。

これと反対にキリスト教は神道的な神々を軽視したため、ザビエル訪日からすでに五百年になろうというのに、信者は一パーセント以下にとどまっている。

神道が日本人の血肉となっているなによりの証拠である。

（なお祭祀（マツリ）という日本語は幼児が母親に「纏（マツ）わりつく」と同源で、神に人々が纏わりつく行為から来ているとされる。じつに人間的な行事である）

◎神社について

以上のようなわけで、現存する神社の数も驚くほど多い。

神社本庁では新宗教的な神社以外の神社を統括しているが、その数は、約八万である。

しかしこれは、宗教法人数であって、お社（オヤシロ）の数ではない。一般に法人としての神社には、境外摂末社・境内摂末社と呼ばれる、系列の神社が多数付属している。

たとえば、《伊勢（イセ）神宮》は合計して百二十五のお社からなっているし、そこから分かれた熱田（アツタ）神宮は四十以上のお社からなっていて、合わせると二百にちかく、そのなかには巨大な神社がいくつもあるが、宗教法人としては

たったの二社である。

先の神社本庁の八万という神社数には、こういう摂末社は含まれていないので、じっさいにお社のある――つまりそこが神社であることがはっきりと分かる――神社の総数は八万より遥かに多く、たぶん、数十万またはそれ以上の数になるであろう。

さらに屋敷内社といわれる、民家の敷地内に奉安された神社まで加えると、おそらくは百万をはるかにこえるであろう。

またさらに、家屋内にある神棚まで入れたら、およそ数え切れないだろうが、それを除いても、おびただしい数の神社があるのだ。

著者は神奈川県のある市内に住んでいるが、家から徒歩二十分ほどの範囲内に、三十もの屋敷内社をみつけている。その多くは稲荷（イナリ）神社だが、散歩のたびに新発見がある。

日本の神社で数の多いのは稲荷神社や八幡（ヤハタ）神社だが、たとえば熊野（クマノ）神社も名が知られている。

神社本庁の資料による東京都内の熊野神社の数は四十社ほどだが、都内を歩いて調べた人の話では、摂末社を入れないでもその三倍はあり、さらに詳しく調べればもっと増えるだろうと述べている。

神社本庁の話では、日本の全神社数は、多すぎて誰も数えた人がいない――ということである。

神社を大切にする人の数も膨大である。神社のなかの神社である《伊勢神宮》――厳密には皇大神宮（コウタイジングウ）――の神札・神宮大麻（ジングウタイマ）をいただく家庭の数は、一千万にちかい。

また、明治神宮はじめ著名神社に初詣する善男善女の数は何千万にもたっする。

さらにお祭りの御輿（ミコシ）や山車（ダンジリ）を楽しむ庶民の数はかぞえきれない。

＊

以上のように、神々の意味からいっても、神社の数からいっても、国民的行事のありようからいっても、あきらかに、日本は「神々の国」であり、それはわが国の誇るべき文化的伝統である。

一例をあげると、いまのわれわれが新年に明治神宮に詣でて明治天皇に感謝したり、「みたま祭」の靖国神社に詣でて英霊に感謝したりする行為は、すなわち、古代から連綿としてつたわる「神々」を崇敬する文化的伝統な

のだ。

＊

神道の話が出たので付記しておく。

日本人は古くから緑豊かな山々を神として崇めてきた――多くの山に鳥居がある！――が、その結果として、日本の森林面積率は世界一を達成するに至った。

さほど広くはない国土の七割近くが森林であり、しかもその森林のほぼ七割が、古くから日本人が大切に植樹し育ててきた人工林である。

これらは、環境問題で話題となる二酸化炭素の吸収にも貢献している。

こんな先進国は他には存在しておらず、欧米の学者も高く評価している。

神道という文化的伝統のおかげである。

＊

神と神社の話が長くなったが、こういうことに思いをめぐらしてから〈卑弥呼（ヒミコ）〉の話にもどると、「神」である〈天照大神（アマテラスオオミカミ）〉と〈卑彌呼〉の尊敬すべき身分である「女王」とは矛盾しておらず、

「〈卑彌呼〉＝〈天照大神〉説」

――にはそれなりの根拠がある、と考えることができる。

二・二 〈神功皇后（ジングウコウゴウ）〉説

◎〈神功皇后〉説について

つぎが、

「〈卑彌呼（ヒミコ）〉＝〈神功皇后（ジングウコウゴウ）〉説」

――である。

〈神功皇后（ジングウコウゴウ）〉はのちにつけられた諡号（オクリナ）（御追号）で、実名は氣長足姫尊（オキナガタラシヒメ）である。近江の地名と関係があり、長命という意味をもっているらしい。

また氣長は『古事記』では息長であり、息が長いために水中に長くもぐっていられるというところから海に関係のふかい一族の出身だろうとも推理されている。

系図的には第九代開化（カイカ）天皇の血筋である。

第十四代仲哀（チュウアイ）天皇の皇后だが、天皇の崩御後に大活躍をし、次の第十五代應神（オウジン）天皇――つまり〈神功皇后〉の御子――が即位されるまでの七十年間の天皇空白期に、天皇の代わり（神功摂政と呼ばれる立場）として国家運営にあたり、男装して朝鮮への出陣（図2・2）もなしたという、興味ぶかい存在である。

だから、『記紀』と同時期にできた『風土記（フドキ）』などでは、皇后ではなく天皇（女王）として記されている。

（本書では、便宜上第十四・五代としている。歴代天皇についてのさまざまなデータは付録を参照されたい）

天皇（テンノウ）という称号は、六世紀末から七世紀初めにかけての第三十三代推古（スイコ）天皇の御代に、日本の独立宣言的な意味で定着したという学説が有力であり、その前は漢字で書けば王とか大王とか称していたらしい。また訓読みとしては、オオキミ、スメラミコトのほかいろいろな尊称があったらしいが、本書では天皇（テンノウ）で統一する。

この興味ぶかい存在である〈神功皇后〉の事績として特に有名なのは、新羅（シラギ）を征伐して凱旋したという話である。

新羅・百済（クダラ）・任那（ミマナ）はもと三韓と呼ばれた地域なので、

図２・２　男装して出陣する〈神功皇后〉
（昭和15年小學國史上巻より）

しかし、〈神功皇后〉の修正紀年である四世紀から五世紀にかけて日本が朝鮮半島に進出した事実は、朝鮮の正史である『三国史記』にもあるし、鴨緑江の北岸に発見された好太王碑（コウタイオウヒ）などにも記されており、これらをもとにして〈神功皇后〉の実在性や三韓征伐伝説の史実性を主張する学者も多くいる。

◎〈神功皇后（ジングウコウゴウ）〉の実在性

著者も、神話的色彩のつよい〈神功皇后（ジングウコウゴウ）〉伝説のなかに、史実の反映が多く見られるように感じている。『古事記』『日本書紀』『風土記（フドキ）』だけではなく、『万葉集（マンヨウシュウ）』にもこの皇后についての多くの歌がある。

もちろん巨大な前方後円墳（ゼンポウコウエンフン）もあるし神社もあるし神社に伝わる古文書もある。各地方には伝承ものこされている。

非実在の皇后についてこれほど多くの史料が残っているのは不思議であり、架空譚説にくみすることはできない。

これは三韓征伐ともいわれている。

この事績について、一部の戦後の学者が架空譚ではないか――と述べている。

架空譚説では、『記紀』の〈神功皇后（ジングウコウゴウ）〉の事績は推古（スイコ）天皇や齊明（サイメイ）天皇――あるいはその前に実質的な女性天皇だった清寧（セイネイ）天皇紀の飯豐青皇女（イイドヨノアオノヒメミコ）――はじめその後の多くの女性天皇の事績を総合して創作した話だとすることが多いようである。

もし完全に架空だったとしたら、大和朝廷が日本中に、史書だけでなく歌集や神社の秘史にまでも「架空の神功皇后」のことを詳しく書け――と命令し、日本中がいっせいにそれにしたがったことになる。

しかし、『記紀』が書かれたころは、まだ朝廷に敵対する勢力すらあちこちにあった時代であり、敵対ほどではなくとも、対抗意識をもつ氏族もたくさんいた時代である。

そういう人たちが『記紀』に不満をもって、独自の史書である『古語拾遺（コゴシュウイ）』や『先代旧事本紀（センダイクジホンギ）』などまで書いている。

また、朝廷への異論が記されているために神社に秘匿されて、戦後になってやっと公開された門外不出の古文書もある。

そのような秘史の類にも、ちゃんと〈神功皇后〉が書かれているのだ。もし架空の女帝だったら、これはあり得ないことであろう。

軍事にかんしてどのていど指導的立場だったかはわからないが、モデルとなる強力な女帝がいたのは確かだと感じるし、また日本勢力の朝鮮進出は、複数の外国文献に書かれているので、完全な史実である。

こういう女帝〈神功皇后〉の出兵によって、とうじの日本は、朝鮮半島南部の任那（ミマナ）という軍事的・貿易的な拠点を大きく拡大確保した。

そして百済（クダラ）とは友邦関係、新羅（シラギ）とは半対立半友好関係となり、元三韓の北の高句麗（コウクリ）とは抗争をつづけた。

任那の日本府は六世紀に消滅したが、その後も日本は朝鮮半島での権益維持に腐心し、半島での日本の勢力が最終的に失われたのは、七世紀後半の中大兄皇子（ナカノオオエノオウジ）の時代だった。

白村江（ハクスキノエ）の戦いで唐・新羅連合軍に破れたためである。そして日本は大陸からの侵攻にそなえる防御に力を入れるようになり、そのための大津遷都などを強行した。

トビラの歌にもある史上有名な話である。

◎日本最古の〈神功皇后〉説

さて、この〈神功皇后（ジングウコウゴウ）〉が〈卑弥呼（ヒミコ）〉ではないかという説の根拠は、『日本書紀』における三世紀前半という紀

年が〈卑彌呼〉の時代と一致していることや強力な女帝であることのほかに、新羅征伐以外の一般的事績についての記述が、妙に『魏志倭人伝』の話と一致している点にもある。

また〈天照大神〉を想像させる点にもある。

したがって、「〈卑彌呼〉＝〈神功皇后〉説」は、もちろん大昔からあるのだが、その説を唱えたもっとも古い人物は、『日本書紀』の編者（舎人親王）そのものだ――ともされている。

なぜかというと、『日本書紀』の〈神功皇后〉紀のなかに、何カ所かにわたって『魏志倭人伝』の記事が引用されているからだ。

この引用については、すこし後の書写した人物が注として付加したのではないか――という説もあるが、そうだとしても、奈良時代か平安時代であり、ひじょうに古い注記であることは間違いない。

だから、飛鳥時代、奈良時代、平安時代といった千何百年も前の時代に、

「〈卑彌呼〉＝〈神功皇后〉説」

――が存在したことは確かである。

もちろん、『日本書紀』の紀年は修正されており、〈神功皇后〉の時代は書かれている三世紀前半ではなく四世紀半ばと推測されているので、科学的には合わない。

しかし〈天照大神〉のところでも述べたように、〈卑彌呼〉についての記憶が、形を変えて〈神功皇后〉伝説に生きていると考えれば、「〈卑彌呼〉＝〈神功皇后〉説」もまた――ある意味では――ありうることである。

とくに、この皇后が大和～敦賀～九州～朝鮮～九州～大和と移動しており、かつその皇子の應神天皇が偉大な伝承をもっていることは、暗示的である。

だから、確からしいといえばとても確からしい説なのだ。

なおこの説は『日本書紀』の選者の舎人親王を別にしてもとても古くからあり、江戸時代の学者、新井白石や伴信友もそうだったらしい。ただし白石はのちに九州説に変わったとされている。

二・三
〈倭迹迹日百襲姫命〉説

◎〈倭迹迹日百襲姫命〉と崇神天皇

つぎが、さいきんになって知名度が急上昇している、「〈卑彌呼〉＝〈倭迹迹日百襲姫命〉説」――である。

〈倭迹迹日百襲姫命〉とは、第七代孝靈天皇のお妃の娘で、第十代崇神天皇の時代に、天皇の大叔母（または叔母）という存在感のもとに、預言者として、また神託を伝える霊能力者として活躍した、神秘的な女性である。

読みのトトヒはトトビかもしれないし、モモソヒメはモモソビメと称したのかもしれない。

（本書の人名のフリガナでは、煩わしいので、名前の最後につく尊称の命や尊の「ミコト」は略すことが多い。一般の読みとしてはこの前に「ノ」をつけるが、一定しないようである。つまり姫命は「ヒメノミコト」または「ヒメミコト」である）

崇神天皇は第十代の天皇だが、実質的には大和地方を中心として日本の主要地帯を統一した最初の天皇だろういわれている。

また聖山として知られる大和の《三輪山》の神である〈大物主神〉の祭祀を天皇家として初めておこない、さらに日本各地に神社の創建をすすめた天皇としても有名である。

そしてこの〈大物主神〉の神託を天皇に伝えたとされるのが、〈倭迹迹日百襲姫命〉なのである。

『記紀』はこの崇神天皇を讃えて「御肇國天皇」――つまり国をはじめて創った天皇――と呼んでいるが、この尊称は崇神天皇と初代の神武天皇にのみつけられているもので、飛鳥から奈良にかけての歴史家にとってとくべつ重要な歴史上の天皇だったことがわかる。

巨大な御陵ものこっているし、この時代の都である三輪山麓の纒向遺跡――本書では《纒向京》と仮称する―

—も発掘されつつあり、実在したことは確実である。

◎古代天皇の実在性

だから崇神天皇が《大和》を中心とした統一国家をつくった最初の天皇であることは確からしいのだが、この天皇以前の九人の天皇が架空の存在だという戦後の一部の史家の主張にも疑問を感じる。

崇神天皇以前の天皇は、紀年を合わせる意図だけで創作したのだという主張なのだが、もしそうだとしたら、天皇一人の寿命をもっと現実的な長さにし、かわりに天皇の数を二十〜三十人くらいに増やす筈であろう。

その方が天皇家の代数が増えて、歴史を古く見せたい施政者にとっては都合がよい。

しかしそうはしていないことからみて、神武天皇以下数代の天皇は、たぶん、大和朝廷が複数の豪族のひとつであった時代の歴代首長を伝承しているのではないかと思う。

大和朝廷とは、大化改新で律令国家に向かうころまでの、《大和》を本拠地として日本の中心だった政権で、もちろん現天皇家の遠い先祖だが、崇神天皇またはその直前の天皇までは、周囲の豪族を完全に従えるところまではいっていなかったと考えられるからだ。

ただし、崇神以前の天皇の実在を認める史家であっても、全員を認めるのではなく、たとえば第八代の孝元（コウゲン）天皇だけは架空だろうと考える学者もいる。

多くの豪族の伝承を集めるとどうしても相互に矛盾がでてくるので、それを解消させるために『記紀』の編者が天皇を一代ふやしてしまった——というわけである。

◎〈倭迹迹日百襲姫命〉の血族

さて本題にはいって、この第十代崇神（スジン）天皇の大叔母——本居宣長（モトオリノリナガ）によれば叔母でもある——にあたる〈倭迹迹日百襲姫命（ヤマトトトヒモモソヒメミコト）〉なる不思議な長い名前の女性が〈卑弥呼（ヒミコ）〉の正体だ——という説が、昔からあるのだ。

笠井新也、肥後和男、和歌森太郎、樋口清之といった大正〜昭和初期にかけての碩学たちが主張しているし、

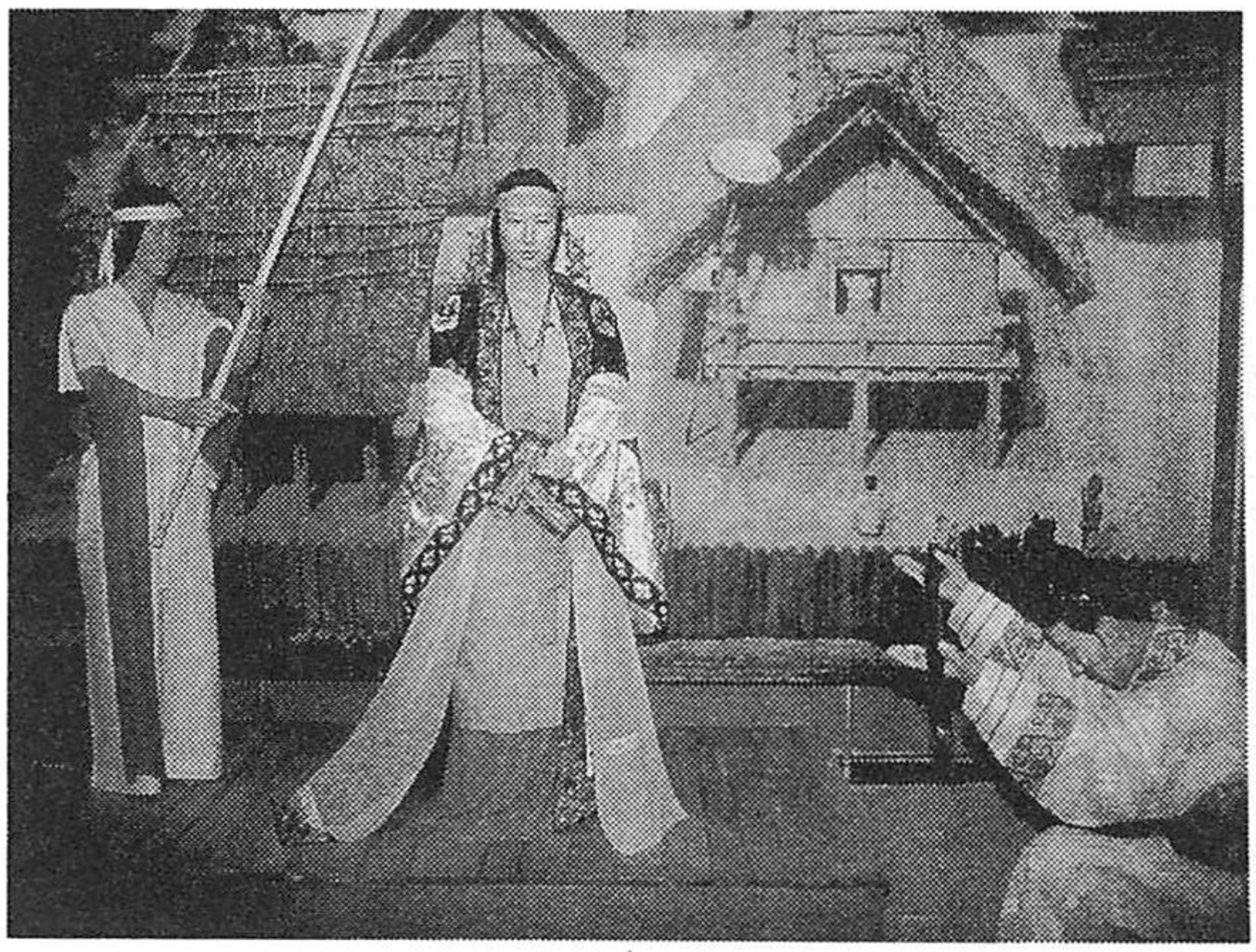

図２・３　中国から戻った使者より
大刀を受け取る〈卑彌呼〉
（大阪府立弥生文化博物館蔵）

さいきんでは考古学者を中心として、慎重に言葉を選びながらも、この説に賛同する学者が増加している。

〈倭迹迹日百襲姫命〉という奇妙な名の由来については、倭が大和であること以外はいくつかの推理があるだけで

よくわかっていないらしいが、特別な女性につけられた名前であることは確かである。

「倭（ヤマト）」というのは大和朝廷の本拠地の《大和（ヤマト）》であり、かつ日本そのものだから、それが女性の名の頭につくという事は、重大な意味をもっている。

『日本書紀』全体を見ても、名の頭に「倭」のつく女性は十名しか数えることができない。しかもそれぞれが極めて重要な地位にいる。

挙げてみよう。

＊

〈倭迹迹日百襲姫命（ヤマトトヒモモソヒメミコト）〉・・・・本人。
〈倭迹速神淺茅原目妙姫（ヤマトトハヤカムアサジハラマグワシヒメ）〉・・本人の別名。
〈倭迹迹姫命（ヤマトトヒメ）〉・・崇神天皇紀七年にある本人の略名。
〈倭國香媛（ヤマトクニカヒメ）〉・・・本人の母で第七代孝靈（コウレイ）天皇の妃。

『古事記』では〈意富夜麻登玖邇阿禮比賣（オホヤマトクニアレヒメ）命〉。

〈倭迹迹稚屋姫（ヤマトトワカヤヒメ）命〉・・本人の妹。
〈倭迹迹姫（ヤマトトヒメ）命〉・・・第八代孝元（コウゲン）天皇の娘で本人の姪。

または本人の別名。

〈倭國豐秋狹太媛（ヤマトクニトヨアキサダヒメ）〉・・本人の曾祖父にあたる第五代孝昭（コウショウ）天皇の皇后の母、つまり

〈倭姫命（ヤマトヒメ）〉・・・

議な語感をもつ意味深長な名であり、とくに〈倭迹迹・・・〉なる名は、無数にある『記紀』のなかの女性を探しても、本人と妹と姪の三人しか見つからない。

すなわち、〈倭迹迹日百襲姫命〉には弟が一人と妹が一人いるが、妹の名は倭迹迹稚屋姫命（ヤマトトトワカヤヒメ）で、やはり倭迹迹がついている。

姪とは、孝霊（コウレイ）天皇の次の孝元（コウゲン）天皇の姫の倭迹迹姫命（ヤマトトトヒメ）である。この姪も謎の女性であり、後述するように〈倭迹迹日百襲姫命〉と同一人物だともいわれている。

〈倭迹迹日百襲姫命（ヤマトトトヒモモソヒメミコト）〉は『古事記』においては、

〈夜麻登々母々曽毘賣命（ヤマトトモモソヒメ）〉

――と書かれており、文字は違うが読みはほとんど同じである。

〈倭迹迹日百襲姫命〉の母親は倭國香媛（ヤマトクニカヒメ）で、大和の国の香という、なにやらとても高貴な名前である。

この名は『古事記』では〈意富夜麻登玖邇阿禮比賣命（オホヤマトクニアレヒメ）〉と書かれており、『日本書紀』よりもさらに丁寧な名となっている。

名の後半のクニアレというのは、国が有る――つまり国を存在させた――という意味とされ、**建国を意味する**きわだって高貴な名である。

この「〈卑彌呼〉＝〈倭迹迹日百襲姫命〉説」を学術雑誌に最初に明確に述べたのは、笠井新也（カサイシンヤ）だとされている。大正十三年のことである。

そのご、梅干博士として有名な考古学者の樋口清之（ヒグチキヨユキ）が大和桜井市周辺の発掘調査などを元にそう推理したし、肥後和男（ヒゴカズオ）、和歌森太郎（ワカモリタロウ）などの著名な歴史学者も笠井説を発展させて〈倭迹迹日百襲姫命〉説を唱えた。

しかし昔は多くの説の一つにすぎず、考古学的立場の暦年計算からも文献学的立場からも否定する人が多かった。

だが、この数年、考古学の進展にともなって支持者が急増してきた。

国立歴史民族博物館副館長の白石太一郎（シライシタイチロウ）はさいきんの考古学的研究によって確信に近いものを持ちはじめたようだし、またジャーナリストの倉橋秀夫（クラハシヒデオ）は、ハイテクに詳しい考古学者へのインタビューを整理して、著書『卑弥呼の謎年輪の証言』のなかでほとんど結論にちかい書き方をしている。

もちろん決定打はない。状況証拠がかたまりつつある

にすぎず、今後の研究によってどのような反証がでてくるかはわからない。

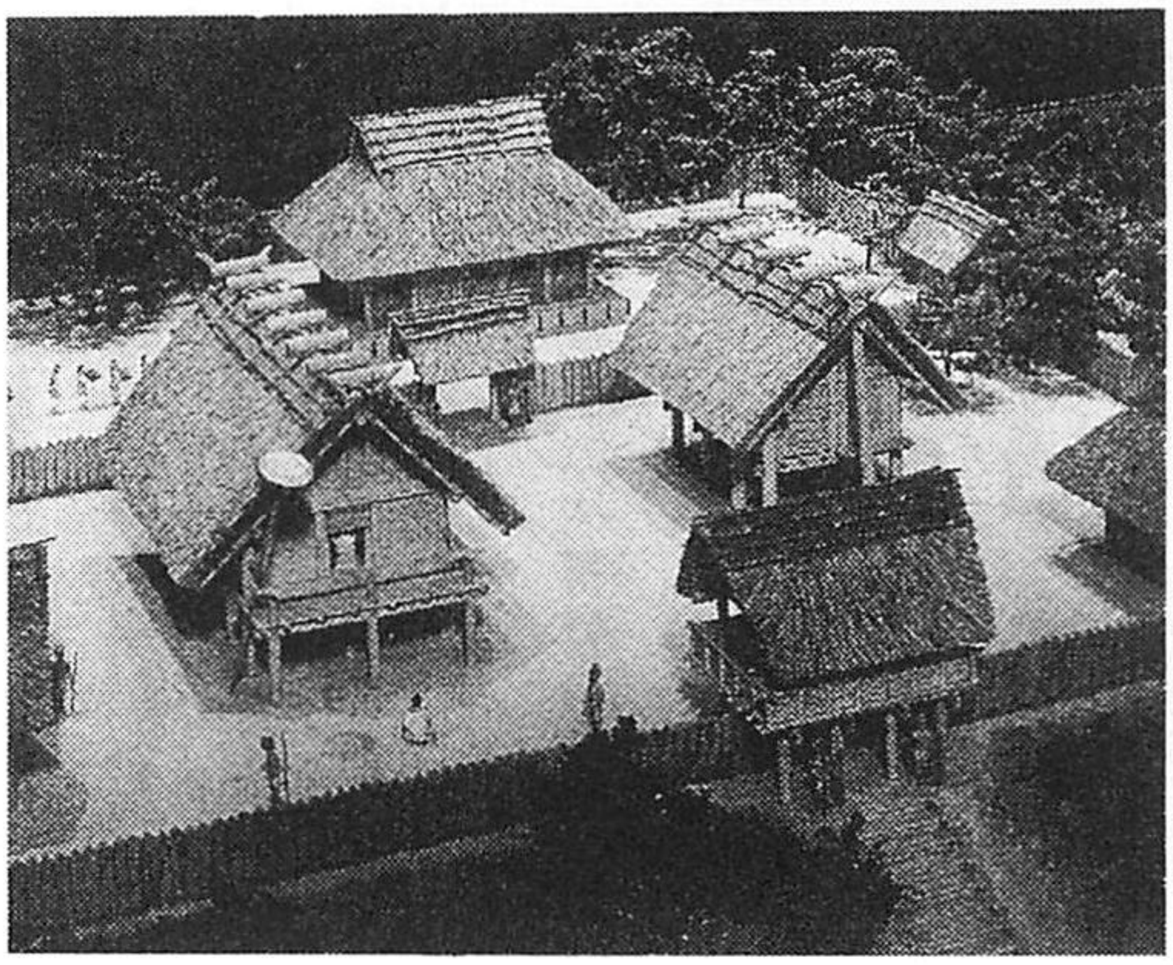

図２・４　復元した〈卑彌呼〉の館
（大阪府立弥生文化博物館蔵）

◎紀年の修正

崇神（スジン）天皇の御在位は、『日本書紀』で計算すると、西暦前九七年から前三〇年までの六十七年間で、御降誕は西暦前一四八年とされている。だから〈卑彌呼（ヒミコ）〉の時代とはまったく違う。

また崩御は退位と同じだから、百十八歳という、信じられないほどの長寿ということになる。

しかしよく知られているように、『記紀』の古い年代は、神武（ジンム）天皇の即位を、

「古代シナの学説で革命が起こると辛酉（シンユウ）の年（西暦紀元前六六〇年）」

――にするために大きく引き延ばされており、『記紀』の数字と実際の年代がほぼ一致するようになるのは倭の五王とされる第十七代履中（リチユウ）天皇から第二十一代雄略（ユウリヤク）天皇の時代（五世紀）以降のことであるし、きわめてはっきりしてくるのは初の女帝として有名な第三十三代推古（スイコ）天皇のころ――六～七世紀――からである。

したがって崇神天皇御在位のじっさいの年代は、西暦紀元以後で『魏志倭人伝』の時代に重なる可能性が高いし、寿命もじっさいはずっと短かったであろうとされている。

（なお〈倭迹迹日百襲姫命〉という名前は、漢字で書いてもカナで書いてもわずらわしいので、失礼とは思うが、〈百襲姫命〉と略称させてもらうこともある）

◎同時代の別の候補

〈百襲姫命〉のほかにも、『日本書紀』のなかの似た時代の女性を探す試みもある。

たとえば、本格的な「《邪馬台国》＝大和説」を最初に唱えたとされる内藤湖南は、崇神天皇の孫にあたり《伊勢神宮》の初代斎王となった〈倭姫命〉を、〈卑弥呼〉になぞらえている。この説も過去にはかなり多くの学者が唱えてきた。

もうひとり、注目すべきは、孝霊天皇のつぎの第八代孝元天皇の皇后で〈饒速日命〉の子孫とされる鬱色謎命が生んだ、前記の〈倭迹迹姫命〉である。

名前がよく似ているので、本居宣長は〈倭迹迹日百襲姫命〉と同一人物だろうとしている。事実、前記一覧にあるように、〈百襲姫命〉をこの略名で記した箇所もある。

本居説が正しいとすると、両親に二説あったことになる。

こちらだと、神武天皇より先に《大和》に入っていて、豪族物部氏の先祖神となった〈饒速日命〉の子孫でもある――ということなので、天皇家と最大豪族の双方の血をひいた別格の身分ということになる。

この意見も、同意する学者が多いらしい。

物部一族と大和朝廷の関係を暗示するからである。

なにしろ飛鳥・奈良時代の歴史家が、天皇家の伝承のほかに各豪族に伝わる伝承を参考にしながら何百年か前の家系を記すのだから、父母に二説あることくらいはやむを得ないが、どちらにせよ別格の父母から生まれている神秘的な名と伝承を持つ女性なのだ。

＊

本章でおおまかに述べている〈卑弥呼〉の候補については、第六章以降であらためて詳しく記すが、とくに〈倭迹迹日百襲姫命〉については、第八章から第十章までの三つの章で、詳細に説明するつもりである。

図2・3と2・4に、〈卑彌呼〉やその宮殿の想像モデルを示した。大阪府弥生文化博物館でつくって展示しているものである。

＊

二・四　『記紀』に記されていない〈卑弥呼〉存在説

ここまでの〈卑弥呼〉の候補者は、みな『日本書紀』に記された貴人だったが、『記紀』とはまったく無関係に〈卑弥呼〉がいた――という説も、もちろんある。

というよりも、論争史においてはこの説が多数派である。

『日本書紀』にある貴人説の場合は、その性質上ほとんどが畿内――とくに大和――に本拠地をおく人物になるが、『記紀』にない女王を候補とする説では、その多くは畿内以外である。

とくに九州にあった大豪族の女王に見立てる人が多いようだ。

たとえば明治の東洋史学者の那珂通世は、

「〈卑弥呼〉は九州南部の熊襲の女酋長である」

――と述べている。

九州のどこだったかについては人によって主張が違うが、〈卑弥呼〉とはある豪族の女性の首長だったのだろう、という点では、多くの九州説学者の意見は一致している。

また女性の首長を持つ九州の豪族が、自分たちこそ大和朝廷だと偽って魏と交流したのだろう、という説も多いが、これは『日本書紀』にそれに近い記述があるからである。

アマチュア史家の場合には四国とか三重県とか東海地方とか新潟とか、あるいはインドネシアのような外国とか、百花斉放で、それぞれの土地に〈卑弥呼〉がいたことにされている。

なかにはたんなる語呂合わせのような説もあり、著者は首をひねるが、じつにさまざまな意見が自費出版本などに飛び交っているし、日本古代史以外の分野では一流の業績を残している学者のなかにも、こういう説を唱える人がたくさんいる。

これらを頭から無視することは出来ないが、そうかといって信じるわけにもいかない。学問的検討に値する史料が乏しすぎるのだ。

例外的に、九州説でも『日本書紀』に記された個人名を出している論者もある。

『米欧回覧実記』を編纂した久米邦武(クメクニタケ)は、第十二代景行(ケイコウ)天皇が九州遠征のときに通過した八女国(ヤメノクニ)の山中に住む女神〈八女津媛(ヤメツヒメ)〉がそうだろうと、明治四十年に述べている。

八女国は現在の福岡県の筑後市から佐賀県の吉野ヶ里(ヨシノガリ)遺跡のあたりだったらしい。

景行(ケイコウ)天皇がこの女神に逢った形跡はないが、それだけに神秘的な色彩があり、〈卑彌呼〉になぞらえた気持ちもわかる。

また明治の史学・漢学者の星野恒(ホシノヒサシ)は、〈神功皇后(ジングウコウゴウ)〉によって征服されたと『日本書紀』にある九州山門県(ヤマトノアガタ)（いまの福岡県山門郡）の〈田油津媛(タブラツヒメ)〉に着目し、この女酋長の先代が〈卑彌呼〉だったのではないか、との説を明治二十五年に出している。

山門(ヤマト)は《邪馬台国(ヤマタイコク)》に発音が似ているし、ひとつの見解ではある。

しかし久米説も星野説も、たんにそういう女性名が『記紀』にあったというだけであり、傍証すらほとんど無く、いまでは支持する人はすくない。

このように、《大和》以外を舞台として、無名の〈卑彌呼〉候補をあげる人は多いのだが、そもそも『記紀』にも無いかあるいはほとんどなく、考古学的証拠もなく、あるのは『魏志倭人伝(ギシワジンデン)』の解釈だけ――という説では、その信憑性(シンピョウセイ)について評価のしようがない。

せめて考古学的な発掘調査で巨大な墳墓や金印や墓碑銘などそれらしい遺物でも見つかればいいのだが、いままでのところ、何も見つかっていない。

見つかるのは『記紀』より信憑性の薄いものばかりである。

＊

・・・というような事なので、『日本書紀』にも『古事記』にもないか、あったとしても断片的な〈卑彌呼〉説については、頭から否定するものではないが、文献史料はまったくないし、考古学的史料も少なすぎるので、以

下の章では検討を加えないことにする。

あげつらったり深入りしたりするよりは、信憑性の高い史料が出現するまでは検討を差し控えるほうが、学問的な態度であろう。